

「台湾は暖かな国である」



随 筆

笠 井 俊 夫*

Taiwan is a warm country

Key Words : Warm country, Human warmth, Be “flexible” and “strong”, Yin and Yang of I-Chin, Tai-Ji, Juming Museum, Identity, Neighbor Taiwan

もう8年前になるが、確か国立台湾大学にお世話になったその翌年に「21世紀のパラダイム・シフトはアジアから？」というタイトルで随筆を書かせていただいたことを記憶する。(「生産と技術」2011年 秋号) そこで書いたパラダイム・シフト(思想枠組みの変革)の予測が本当に正しかったのかどうかは別として、その随筆の中で東洋と西洋、日本と台湾の歴史、文化、言葉等を比較することで21世紀は台湾、日本を含めてアジアが世界のオピニオンリーダーになる可能性があるとの内容であった。そして今、台湾での生活がもう9年になろうとしている。その間、不幸にして東日本大震災、福島原発事故があり(ちなみに台湾から一番に多額の義援金が日本に贈られたと聞いている)、また経済紙面では台湾「ホンハイ」のシャープ買収もあり、何かと台湾が話題に上っている。従って今回の随筆では、日本の近隣の国である台湾を私たちはどのように理解し、位置づけ、また必要であれば何を学ばなければならないかについて前回とは少し違った角度から考えてみたい。

随筆タイトルに「台湾は暖かな国である」と書いたが、それは「台湾は日本より南に位置するので亜熱帯的に気候が暖かい」とか、「地球温暖化の影響で暖かい」とかについて申し上げることではないということは勿論ご承知いただけと思う。タイトルに

「暖かな」と敢えて書いた背景には、昨今、大は世界の多くの国々、そして小は日本国内の地域社会において、政治、経済、文化、教育、研究等に関しての「暖かくない」ケースを多々見るにつけて、人間集団の「暖かさ」の重要性を改めて考えさせられるからである。日常的に報道されている日本の学校での「いじめ」は、人間の暗い側面をあらわに見せる「暖かくない」典型的な一例かも知れない。学校のみならず職場や大人の日常社会においても「いじめ」が起こっていることも報道されている。

もう5年前になってしまったが、機会があって日刊ケイザイ新聞に寄稿文を書かせていただいたことがある。そこでは、産業振興と文化の関連について触れる必要があり「文化芸術の創生で次世代の経済発展を」と論じた。またその中で「中国古来の伝統や文化、生き方は台湾に引き継がれている」と書いた。私がこの随筆で「台湾を暖かい国である」と語るのは、中国古来の伝統や文化、生き方が台湾に引き継がれていることと無関係ではないかも知れないと思っていることにも起因する。

さて、とある新聞の読書欄に松木武彦氏(考古学者、国立歴史民俗博物館教授)による何義麟著「台湾現代史——二・二八事件をめぐる歴史の再記憶」(平凡社)の書評に面白いことが書かれてあるのを思い出した。松木氏は『美味しい物を食べ、故宮博物院で目の保養をし、古い伝統文化を楽しむ。観光で旅する台湾のイメージはそういったところだろう。だが、少ししかめつらしい話をすれば、歴史と人と社会が織りなす関係を、ここまで鮮やかに観察できる場所は他にないと私は思っている。・・・歴史と人と社会のこのような関係のあり方をめぐって、いま台湾では議論が盛んだ。日韓や中国とはいっぼう異なった歴史とのつきあい方をする、この「しなやか」で「したたか」な隣人たちの歩みを知るためには好

* Toshio KASAI

1946年9月生まれ
大阪大学大学院理学研究科無機及び
物理化学専攻博士課程修了(1978年)
現在、国立台湾大学化学系客座教授、
大阪大学産業科学研究所招へい教授
理学博士、大阪大学名誉教授
TEL : 886-2-33668984
FAX : 886-2-23621483
E-mail : tkasai@ntu.edu.tw



個の一冊である。』と述べている。

ここに書かれてある「しなやか」で「したたか」なという点こそがまさに、日本とは対照的に「台湾は暖かな国」であるということではないかと私は考えている。そのことについて語るまえに、まず台湾と日本の歴史上のそして思考パターンの共通点と相違点を簡単にまとめてみよう。

まず共通点は次の4点である。

1. 小さな島国で資源に乏しいが技術力がある。
2. 義務教育が全国民に行き渡り、勤勉である。
3. 文明起源である中国文化（加えてインド文化）の影響が強い。
4. 現存する世界唯一の象形文字である漢字を、書き言葉として使っている。

つぎに相違点であるが以下のようなになる。

台湾：

1. 過去にオランダ、スペイン、ポルトガル、中国、日本など様々な国によって植民地支配された。また米国からの文化・政治上の影響も大きい。その結果、台湾の文化が多様化され、人々の思考方法や性格は開放的で、様々な文化と思想を受け入れる国民となった。
2. シャベリ言葉・書き言葉ともに中国語を日常的に使い、その表現は中国語に特有の「具体的かつ現実的」な性格である。

日本：

1. 13世紀に蒙古襲来（文永の役、弘安の役）があったが（神風によって？）外国による征服から免れた。また江戸時代末期にペリーが浦賀に来航し、日米和親条約締結などの経験はあるが植民地化されていない。日清、日露戦争で勝利したものの、最終的に太平洋戦争で無条件降伏となりポツダム宣言の受諾で戦後を迎えた。この敗戦によって初めて近代民主主義が日本に導入された。
2. 言語表現は、カタカナ、ひらがな文字を巧みに組み入れて漢字だけではない独自の言葉を発展させて日本語を完成させた。日本語はきわめて、「心情的・感覚的」な表現で成り立っている。

私見であるが、日本語が「心情的・感覚的」である理由のひとつは、限られた文字長（＝語りの時間）

で記述できる内容量は、中国語に比較して圧倒的に少ない。その結果、「行間」に意味を持たせざるを得なくなり「心情的・感情的」なものとなったのではないかと考えている。

さて上述の台湾と日本の共通点は、概論としてたしかに正しいと考えているが、その詳しい内容にまでもう一步踏み込んで観察してみると、また違った側面が見えてくる。そのことについて以下に述べる。

共通点1 「小さな島国で資源に乏しいが技術力がある」に関しては、日本と台湾の国土のサイズの違いを考慮に入れるべきであろう。台湾の国土は日本の九州一島にしか匹敵しない。その結果、自国内だけを市場とする規模を前提にした国の経済は小さすぎて成り立たない。他方、日本は生産品種に依存はするが国内だけを経済市場とすることも成り立つ場合が多くある。このような国土のサイズの違いが、じつは国際性の重要度に対する感覚および認識に大きな違いがでてくる。つまり両国ともに小さな島国に変わりはないが、そこに住む人間の精神性、思考パターンは大いに異なり、台湾は「国際人」思考、一方、日本は「井の中の蛙」思考と言えるだろう。（加えて、国際化・グローバル化に不可欠な語学力にも大きな違いがあり、台湾の英語力は日本のそれよりも優れている）この思考パターンの違いは、市場における人々の多様性をどう認識しながら商品を作り、販売していくのかの戦略に大きな違いとなって発現するだろう。これが「ホンハイ」と「シャープ」との相違かも知れない。

共通点2 「義務教育が全国民に行き渡り、勤勉である。」に関しては、その中の「勤勉」という言葉の本当の意味を分析する必要がある。両国が戦争による国土の荒廃のどん底からみごとに立ち直ったのは間違いなく、それは人々の「勤勉」さによることである。しかし、そこで見逃してはならないことは、両国ともそれは日々の苦しい生活から発した人々の自主的と呼んでもよい「勤勉」によるものであったのではないかと私は考えている。貧しさから脱出したい願いが勤勉の原動力であり、上から強制されたトップダウンの勤勉ではなかったはずである。しかしながら日本は、そのような人々の自主的な勤勉さを、ピラミッド化された組織という国策による成功と誤解した。その結果、ピラミッドのトップ層

の権威主義が生まれた。それを公の組織に関しては官僚主義と呼んでも良いかも知れない。私の観察するところでは、日本では近年ますますこのトップダウン構造が進み、組織として硬直化してしまったのではないだろうか？組織の硬直化は何を決定するにしても多数のプロセスを必要とする結果を生みだし、無駄な時間と責任の所在の不透明化を生む。そしてピラミッド底辺の人々に対しては、時間的にも内容的にも管理する体制が生まれた。このトップダウン構造による組織の硬直化は、創造性を第一とする研究・教育の場である大学においても、私が現役時代からすでに始まっていたと記憶する。日本を離れて眺めていると特に感じるが、このトップダウン構造の上に立つ人間は、「人々に奉仕する公僕 (civil servant) である」という本来あるべき認識から、「組織を管理する立場である」という考え方に豹変してしまっている。その結果、都合が悪ければ公文書ですら塗りつぶすのも平気な感覚に染まると言った、異常ともいえる状況を生んでいるのではないか。このような日本の硬直化された精神性は、台湾の「しなやか」で「したたか」な精神性とまったく対照的だ。多くの場合、「組織による判断」というのは、「誰も責任を持たない判断」ということと同義である。

それではなぜ台湾は「しなやか」で「したたか」な暖かい国なのであろうか？このことについて考察しよう。台湾には、世界的に有名な彫刻家・朱銘 (1938年生) の美術館がある。朱銘美術館 (Juming Museum) のパンフレットに載せられている図1(a)の地図からその敷地の広大さを想像していただけるだろう。また図1(b)のオブジェは、朱銘氏の「太極 (Tai-Ji)」をテーマとした《太極系列》の一作品である。私が知る範囲で、「太極」という概念は台湾において大きな比重を占める考え方で、台湾の人々の精神性の大きな支えとなっている。身近な例として武術の太極拳を想像していただければよいかも知れない。太極拳はもともと道教から発し宋時代に体系化された武術といわれているが、台湾では楊派 (Yang) の太極拳がよく普及しており、その原理は武術の攻撃面をあえて避け、護身に徹するものだと理解することができる。「戦を避けることがすなわち徹底した戦い」と見なす武道と言えよう。個人的な話で恐縮だが、私はもともと格闘技が趣味な



図1 (a) 朱銘美術館のパンフレットの表紙と地図。美術館および屋外の敷地の広大さを想像していただける。



図1 (b) 朱銘彫刻《太極系列》の一作品。

ので日本では空手、ボクシングに手を染め、台湾ではこの楊派の太極拳を習っている。その体験を通して攻撃性を避ける特質をもつ「太極」の意味を何となく直感することができる。私は、この攻撃を避ける攻撃という太極の特質が、じつは台湾をして暖かい国にしている一つの大きな要因ではないかと思っている。

さて冒頭で、「中国古来の伝統や文化、生き方は台湾に引き継がれている」とことと「台湾が暖かい国である」とことが無関係ではないと述べた。そのことについて少し考察してみよう。中国の歴史をさかのぼれば、「太極」の言葉の由来は3000年以上前に書かれた「易経」に至る。易経は四書五経の筆頭の経書で、歴史上それは数千年かけて先人が蓄積した人間の統計的英知をもとに人間はいかに生きるべきかという思想・哲学の最高の書とみなされ学ばれていた。(このことについては河村真光著「易経入門」(光村推古書院)のすばらしい易経入門の書があるので

機会があればご一読されたい。中国語であれば「周易本義」というのが国立台湾大学図書館にも所蔵されている。) 要は、松木氏が書評の中で台湾の「しなやか」と「したたか」な精神について述べられたが、これはまさに易経でいうところの「太極」から派生した「陰」と「陽」に該当すると解釈できないこともないと思はれている。「しなやか」が「陰」であり、「したたか」が「陽」である。そしてどちらが欠けても物事は成り立たない。片方だけしか考えない状態というのは危険な状態である。「易に三義あり」という言葉がありそれは、変易、不易、易簡のことであるが、その中で変易(変化)と不易(不変性)が易の二面性を示しているのであれば、片方だけを考えればそれで良いという考えは成り立たないだろう。栄枯盛衰は世の常であり、あらゆることに、「しなやか」な精神と「したたか」な精神の両面をもって対応しなければならないことが結論できる。

ご承知のように台湾は、近隣からさまざまな側面で常に脅威にさらされ、加えて独立した国とはいまだに認知されていない。この事実は日本の状況とは大いに異なる。そのような背景のもとではじめて、台湾の「しなやか」で「したたか」な精神が生まれたのではないだろうか。台湾は、過去の伝統を自負したり、自国の優位性を前面に出して国際舞台で自己主張する立場にないことをしっかりと自覚している。翻ってみれば、このような台湾の真摯さと実直さが、現代の日本に欠如するところではないだろうか? 結論として言えることは、それぞれの国は、お互いに自らの原点に立ち戻り、自国の“Identity”を、過去に求めるのではなく未来に向けて創出してゆかなければならないのではないだろうか。日本は、近隣の国を「他山の石」として、「しなやか」で「したたか」な隣人たちの歩みを学び、そこから自国を今よりもより暖かな国とすることができるのではないかと私は思っている。

最後になったが、図2は台湾で一番高い山、玉山(旧称は新高山・にいたかやま)、図3は台湾の人気観光地、九份(ジオウフェン)。私はデジカメやスマートフォンを持っていない「時代遅れの人間」なのでスケッチブックをもとに描いた愚作の絵を台湾を紹介する写真として載せさせていただいた。



図2 玉山(旧称新高山・にいたかやま) 3,952 m
台湾で一番高い山。油絵(F4)



図3 九份(ジオウフェン)「千と千歳の神隠し」の世界と呼ばれている台北から東北に30 kmの所にある人気の観光地。油絵(F30)